

武松商事

【神奈川】「これからの時代は中間処理場を持っていくだけで難しい。その先を見据えていかないと顧客のニーズに対応できない。いかに付加価値を高めていくか、どんなビジョンを描けるかが問われる」。

武松商事（武松ひで社長、横浜市中区）の金森和哉常務はこう力説する。

緑ナンバーを取得しているほか、危険物倉庫を構えた時期もあるが、主戦場はあくまで静脈分野。廃棄物の取り扱いは神奈川県でも有数の規模を誇り、物流企業の業務も請け負っている。近年は運送事業者が産業廃棄物の収集・運搬許可を取得するケースが散見さ

れるが「運ぶという点に関しては、運送事業者のほうが優れている。パトナリシップを構築できるはず」と協力を呼び掛ける。



工場（横浜市金沢区）

養豚をブランド商品へ

動脈、静脈という従来のバラエティが崩れつつある中、静脈物流分野への進出を目指す運送事業者にとって、同社のような確固とした地位を築いている企業とタイアップするなどが参入を果たす一番の近道になるかも知れない。

1952年に始めた古紙

時代先取り新事業

や資源物の回収事業が出発点で、やがて廃棄物事業に本格的に進出していった。

84年5月に木くずを製紙原料や燃料チップに変える木材リサイクル工場を稼働。現在はグループで3か所のリサイクル工場を運営し、粗大ごみ、金属くず、廃プ

ラスチップなど多種多様な品目をカバーしている。保有車両は130両を数え、各種パツカト車をはじめ、2槽式分別車、ブックロー、車庫、機密文書シュレツター車と豊富にラインナップ。取引先企業は700社を超えており、リツカ

0.0頭の豚を飼育しているが、将来的には3000頭の規模に拡大し、ブランド商品に育てる構想だ。農産物の生産も手掛けており、豚のふん尿で作る肥料を準備を進めている。1年後

をメドに、横浜市に廃プラステックのリサイクル工場を新設するプランもある。このほか、カーナビゲーションを活用し、新人が即日からの業務を遂行できるシステム構築も課題に挙げる。金森氏は「以前はごみを

6月にエコパトナリ契約を結んでいる。

「入り口から出口までの仕組を整備する」。時代を先取りした新規事業にも次々と着手。食品残さから飼

料を製造する一方、2004年2月には千葉県で養豚場の経営に乗り出した。1

供。こうした地域密着型の

（沢田 顕嗣）